

地域で学び、地域と共に歩む松本大学の今。

松本大学学報

sokyu 蒼穹

2015.3 Vol.118



平成28年春卒業予定者の就職活動スタート — 合同企業説明会に69の企業、団体、公的機関が参加

特集 大学COC活動の道筋を描く

P.02

●「大学COC事業」による最近の取り組み

学生参加のまちづくり 着実に成果 P.03

女性の健康管理を学ぶ講演会／高大連携スイーツ開発 P.04

●加速するグローバル人材育成の取り組み P.06

●食による地域活性化 P.07

●卒業研究・卒業論文発表会、大学院修士論文審査発表会 P.08 ほか

大学COC活動の道筋を描く

文部科学省が「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の募集・採択に着手し、本学が採択されてから1年半が経過しました。COC事業としては5年間と期間が区切られていますが、6年目以降も同事業の延長線上で活動が継続していきます。COC活動から見た課題、今後の展望、そして本学にとっての意義を考えておきましょう。

(松本大学地域連携戦略会議 議長 木村 晴壽)



COC 事業の背景と特徴

COC事業を開始するにあたり文部科学省が掲げた目標を要約すれば、「各大学は、自らが位置する地域社会の諸団体と連携し、地域課題の解決に向けて貢献すべき」であり、そのために有効と思われる活動であれば財政的に支援しよう、ということでした。補助額の規模が比較的大きかったこともあり、COC事業に申請した大学の数は相当数のにのびりましたが、そこには次のような混乱があったことも事実です。すなわち、地域課題が深刻化していることも、地域社会が山積する課題で苦しんでいることも理解はできるが、では、課題解決に向けて貢献すると言っても、いったい何をどうすることから始めればよいかわからない、というのがほとんどの大学の実情でした。

そこで文部科学省は、教育・研究・社会貢献という3つのカテゴリーを提示することで、それぞれの活動がよりイメージしやすくなるような土俵を用意しました。そもそも、教育・研究・社会貢献とは、およそ大学であるならばすべての大学に求められる要素であり、それ自体は決して目新しいものではありませんが、COC事業の最大の特徴は、それらすべてのカテゴリーで地域を強く意識した活動、すなわち“地域志向”の活動を展開するよう求めた点にこそあります。その結果として多くの大学が、何らかのかたちで地域社会へ貢献する存在となることが期待され、さらに、大学が地域運営の核心を担う、まさしく「地(知)の拠点」となる状況を創り出そうとしました。どのような人材を育成しようとして教

育しているのか、どこの誰にとってどのような役に立つ研究をしているのか、こうした肝心なところで鮮明さを欠く大学のあり方に、かなりの音量で警鐘が鳴らされたと感じた大学人は少なくないでしょう。

地域貢献の尺度はあるか

地域貢献・地域密着など表現は様々ですが、要するに強烈な地域志向を持った大学として発足した松本大学は、これまでの十数年間、地域社会に貢献できる人材とはどのようなものか、しかも信州という地域の発展に寄与するにはどのような能力が必要なのか、と常に問いかげながら、夢中で大学づくりを進めてきました。その結果、地域との連携という点についてはそれなりの評価を得つつありますが、ここに来て私たちに突きつけられ始めたのは、本学は果たして当初の目的を達成したのか、あるいは目標達成にはほど遠いとしても、第一段階的にでも目標に近づいているのか、という鋭い問いかけです。特に、COC事業に採択されてからの1年半は、この答えを探し続けていたと言ってもよいでしょう。これは、大学で行われる様々な活動の成果、つまり大学の社会貢献度をどのように測るかという重要な論点に直結するテーマです。当然のごとく、文部科学省が提示した教育・研究・社会貢献という3分野での評価が基本となりますが、ここに大きな問題があるのです。教育の成果を何で測るのか、研究の成果をどう測るのか、さらに社会貢献の度合いを測る明確な基準はあるのでしょうか。実は、これ以外にないという明確な基準などないのです。

教育・研究の成果を地域社会でどう活かすか

では、明確な基準がないからこのままでいいのかと言えば、やはりそれでは済まされません。したがって、大学の貢献度を教育・研究の両面から何らかの尺度で測ること、特に本学の場合には、地域社会への貢献度を測る尺度を確立することが今後、第一の課題となります。ところが、社会貢献の分野はどうでしょうか。果たして、教育・研究と並立するカテゴリーになり得るのでしょうか。

大学づくりの根幹は教育・研究であり、この両分野での成果を通じて社会貢献、ひいては地域に貢献するのが大学のあり方ではないでしょうか。このような考えに立って高等教育界の過去を振り返ると、ひとつの大きな課題が未解決であることに気づかされます。教育・研究の両分野で某かの成果があると考えるのならば、その成果が社会に還元されるところまでの責任を、大学は持つべきではなかったでしょうか。教育においては授業をるところまでで終わり、研究では論文を書けば終わり、つまり、授業をしっぱなし、論文を書きっぱなし、というケースもあったのではないかとこの反省点が浮かび上がってくるわけです。それらの成果を実際に社会で役立てる努力をさらに行う必要がある、と結論づけることができます。

本学のCOC活動を通じて、「本学は当初の目標を達成しつつあるのか」という疑問に答えるためにも、今後のCOC活動は、どのような意味で本学が地域社会に貢献しているのか、あるいは教育・研究の成果がどのように地域社会で活かされているのか、この点を重視して組み立てていくこととなります。

学生参加し上土のまちづくり

松本大学地域連携戦略会議 委員 白戸 洋

地道な活動から商店街に活気

「おかみさんと学生たちで何かできるのか」。上土商店街に学生たちが関わり始めた10年前も前のことです。まちづくりに真剣に関わってきた商店主が率直な思いを口にしました。松本城の東側に位置する上土商店街は、城のお堀の土を揚げたことから「揚土」と呼ばれ、大正期に映画館や喫茶

トロな景観を活かしたウォークラリーや街に集積する菓子店を巡るスイーツラリーなどの企画に取り組み、10年の間にすっかり街に溶け込むことが出来ました。平成24年12月からは、商店街に新しい居場所を創ろうとコミュニティ・カフェ「上土日和」が始まりました。2カ月に1回、街の中の店舗やホールを借りて、カフェを開催し、子どもや



コミュニティ・カフェ「上土日和」でお菓子の日を開催

店、ミルクホールなどの庶民の娯楽の街として発展しました。「大正ロマンのまち」として看板建築の建物を活かしたまちづくりに取り組んできましたが、バブル崩壊後は客足が減り、数多くあった映画館も全て閉館し、商店街近代化の事業の負債が街に重くのしかかり、10年前は「まちづくりはもうこりごり」という雰囲気でもあったのです。

学生たちは、そんな中でも街で一番元気だった「おかみさんの会」とともに、一斉清掃や花植えなどの地道な活動から始め、レ

高齢者が楽しめるチョコレート作りやクラフト製作、学生たちが開発したスイーツの提供、キッズコーナーなど、毎回学生と商店街の人々が一緒になって取り組み、今ではすっかり定着し、毎回楽しみに来て下さる常連さんも増えました。

新たな拠点整備し着実に成果

学生たちの思いがいつか街に伝わり、平成25年度には振興組合によるまちづくりの学習会「ずく出せ学習会」が始まり、

15年ぶりの映画祭の復活や、初めて敬老会を開催するなど、街に変化が見え始めました。さらに平成26年3月には、大学COC事業の一環で、「大正ロマンの学習会」が開催され、大正村の視察や大正期の食についての学習会が行われました。その成果を活かし、平成26年度には「大正レト



上土商店街マップを製作

ロール」や「大正ロマンカレー」などの商品開発や大正期の生活道具を集めて商店のショーウィンドウに展示する「大正ロマンギャラリー」など様々な活動につなげました。平成27年1月にはおかみさんの会と一緒に製作した新しいまちあるきのマップも完成したのです。



5月に開店する「カフェあげつち」

すっかり元気になった商店街の人々は、今新しい挑戦を始めようとしています。大正期の建物を修復して街のシンボルとなっている上土下町会館に新しくまちづくりの拠点として「カフェあげつち」を平成27年5月に開店するとともに、街のランドマークとして看板建築が残る古い映画館を再建する「松本電気館プロジェクト」を開始しました。そのために町会と商店街振興組合を合体し、新たに「上土・大正ロマンのまちづくり協議会」を立ち上げ、このほど街の人達と学生と一緒に「高崎電気館プロジェクト」や川越のレトロな街並み、明治大正期の建築を展示する「江戸たても園」などに学ぶ研修会を実施し、様々なヒントを得ることができました。



街の人と学生がまちづくりを視察

10年間の取り組みは地味ではありませんでしたが、着実に街を変えてきました。ここ数年は若い人たちが古本カフェや陶器カフェ、居酒屋、美容室などを出店し、いつしか空き店舗はほとんどなくなり、少しずつですが街は活気を取り戻しつつあります。「先生ちゃんとやったね」と、かつて何ができるかと厳しかった商店主が褒めてくれました。この春から始まる「カフェあげつち」には、ゼミで街に関わってきた学生がスタッフとして「就職」することが決まっており、まちづくりと大学の関わりは新しい段階に入ることになるでしょう。

「女性の健康管理」の重要性を再認識 ～人間健康学部健康栄養学科・公開特別講演会開催～

健康栄養学科 学科長・教授 廣田 直子

女性は平均的には男性よりも長寿であり、平均寿命から健康寿命(日常的に介護を必要とせず自立した生活ができる期間)を差し引いた年数の長さは女性にとっては大きな問題です。しかも、女性のライフステージ別健康課題は男性よりも複雑です。

2月14日に開催したNPO法人HAP(Healthy Aging Projects For Women)理事長で日本女性医学学会認定薬剤師の宮原富士子氏による「女性のライフステージに応じた健康管理～専門職間の連携の視野も含めて～」というテーマの公開特別講演会は、こうした視点について考えることを目的としたものでした。

以前から研究活動でお世話になっている宮原氏ですが、いつも多岐にわたる活動とそれをテキパキとこなすパワフルさに圧倒されていました。今回、講演をお聞きして、その源はライフワークとして取り組んでいらっしゃるウィメンズヘルスケアへの思いではないかと感じました。

講演では、学童期から後期高齢期までにわたる女性のライフステージに即した保健教育についてお話しくださいました。聴講者は一般男性2名を除くと、学生からシニアまでの幅広い年齢層の女性でしたが、それぞれが自分の将来を見据えて健康について考えた時間であったと思います。薬剤師

という専門性を活かした実践に基づいたお話は大変説得力のあるものでした。

管理栄養士や薬剤師は自分の専門業務にこもりがちですが、在宅医療などの現場で求められる多職種連携には、顔の見える関係づくりが不可欠であると強調されました。さらに、女性が健康で長生きし、その健康力を持って高齢化を支えていけるようにするための保健教育こそが重要であり、松本大学でも「女性の健康力は日本の底力」であることを地域住民の皆様に伝え、生活の場での活動に取り組んでほしいとエールを送っていただきました。

若者の感性でスイーツ開発 ～高大連携「バレンタインまで待てない」開催～

高大連携推進委員会 委員長 白戸 洋

2月7日と8日の2日間にわたり、山形村のアイシティ21にて、第2回の「バレンタイン・スイーツ～バレンタインまで待てない～」を開催しました。「バレンタイン・スイーツ～バレンタインまで待てない～」は、商業を学ぶ県内の高校生がマーケティングなどを学ぶマーケティング塾と、その学習成果を活かして自ら企画開発した商品を販売する「デパートゆにっと」(合

同販売会)による「デパートサミット」の取り組みを踏まえ、「デパートゆにっと」のアンテナショップとして長野県商業教育研究会が主催し、2014年2月に初めて開催されました。これは、商業の学びを深めるとともに、産業界や地域と連携して次代を担う若者を育てる試みとして県内でも高く評価されて

います。本年度は、大学生も参加し、より多くの若者のアイデアを発信するために、長野県商業教育研究会と株式会社井上百貨店の協力のもと、本学が主催して実施しました。

諏訪実業高校、丸子修学館高校、辰野高校、穂高商業高校、松商学園高校の5つの高



校とともに、本学からは総合経営学部白戸ゼミ、人間健康学部矢内ゼミ、松商短期大学部金子ゼミから100名近くの生徒・学生が参加し、22品目の若者らしいアイデアを活かしたスイーツを地域の菓子店と協力して開発し販売しました。

イベントに先立ち1月24日には会場にてマスコミも多数参加して商品発表会も行ないました。ポップなどの販売促進のグッズやお客様への接客練習などの事前の準備にも力を入れた甲斐もあり、5つのショーケースでの販売は売り切れが続出し、2日間で90万円を超える売り上げとなりました。参加した生徒・学生はお互いに連携しながらひとつの売り場を動かしていく実際の「商い」を体験し、あらためて商売の奥深さを学んだ2日間となりました。



総合型地域SCと大学との連携考える

スポーツ健康学科 学科長・教授 犬飼 己紀子

去る1月23日に、長野県内の総合型地域スポーツクラブ(SC)と大学との連携に関するセミナーを開催しました。これは、2013年に締結した、本学と長野県総合型クラブ連絡協議会、長野県体育センターによる三者連携協定に基づくものです。

まず、NPO法人とよおか総合型地域SC(豊丘村)の酒井浩文さんが、大学生を巻き込み、活動の楽しさを前面に出した『遊び心満載』のスポーツイベントの紹介をしてくれました。続いて、うえだミックススポーツクラブ(上田市)の荒川玲子さんが、女性特有の『つながり力』が総合型地域SCに欠かせない原動力であること、また、今子どもを指

導できる人材が必要など、学生に熱心に語ってくれました。

本学からは、中山雄太君(スポーツ健康学科4年、田邊ゼミ)が、富士見町での運動会に向けた教室や、喬木村での運動遊び指導など、地域での活動体験が自分たちを成長させてくれたことを報告しました。

フロアからの質問に対しては、酒井さんが、「本来の仕事しながらボランティアをすることにより、スポーツと関わっていける」と応え、荒川さんは、「スポー

ツに関わる自己実現の場として、本務の仕事とすることを念頭に置いて也十分に価値がある」と学生に訴えかけました。最後に、コーディネーター役の本学非常勤講師・吉田勝光氏が、若い力へのますますの期待が膨らんでいるとして、まとめの話をしました。

本セミナーには、長野県体育センター、伊那市、小川村などの総合型地域SC関係の皆さんのご参加もいただきました。



インフルエンザと栄養素代謝の関わりを知る ～人間健康学部健康栄養学科主催・特別講演会～

健康栄養学科 専任講師 沖嶋 直子

去る12月20日に、徳島大学疾患酵素学研究センター特任教授の木戸博先生をお招きして、特別講演会「インフルエンザの重症化、インフルエンザ脳症の発症に係わる糖と脂質の代謝不全、その治療法」を開催しました。

インフルエンザと栄養素代謝は一見関わりが薄いように見えますが、インフルエンザに感染すると、解糖系で生成されたピルビン酸のアセチルCoA(補酵素A)への変換が阻害され、その結果ATP(アデノシ

ン三リン酸)が減少して「エネルギークライシス」になる事、またこれを市販の某ドリンク剤に含まれているDADAによって改善できる事、さらにインフルエンザ脳症の発症には、脂質代謝に関わる遺伝子多型が関係している事をご講義いただきました。また現在開発中のインフルエンザ経鼻ワクチンや、抗インフルエンザ薬を多用すると患者にインフルエンザの免疫が付きにくくなり再感染しやすくなりますが、それ

をマクロライド系抗生物質が改善する事などについても、お話しいただきました。

平素は医療関係者に講義されている内容を、学部生向けにできるだけ平易にいただき、かつ、講演内容の他、先生が大学生だったときの経験談や研究を行う上での大切な事として、自分の物差し(基準)を持つ事などについてもお話しいただきました。学生たちにとっては若干難しい内容でしたが、木戸先生の熱のこもった講演を皆集中して聴講していました。受講票の記述からも、多くの学生が感銘を受けたことが読み取れ、開催して良かったと思える講演会となりました。

COCインフォメーション

文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)として、下記の講座を開講します。

高大連携出張実験室

「自分の遺伝子型を調べてみよう」



本学大学院健康科学研究科山田研究室では、「地(知)の拠点整備事業」を活用して、大学から高等学校へ出張する実験教室「自分の遺伝子型を調べてみよう」を企画しました。大学から機材・器具を持ち出し、講師とティーチングアシスタントを派遣して行う初めての試みです。

実験教室は、受講者の唾液からDNAを単離・精製し、遺伝子の一塩基多型を決定することにより、①お酒に強い/弱いか②走りやすいか/どうか③短距離走型筋肉か長距離走型筋肉か、という体質を調べる内容で、「物質」としての遺伝子と「情報」としての遺伝子を理解することを目的としています。

過去7年間に渡って日本学術振興会の研究成果の社会還元事業の一つである「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」や科学技術振興機構の「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト」に採択され、高校生を対象に実験教室を開催してきましたが、今回、高校側からの要望などもあり計画しました。

高校の先生方には、実施日程の調整、生物実験室等の場所の確保、参加者の募集を行っていただくものです。今回は初めての出張実験教室ということで、人数は最大で20名を見込んでいます。興味のある高校はお気軽にお問い合わせください。

お問い合わせは、**本学入試広報室**
(0263-48-7201)まで

加速するグローバル人材育成の取り組み

国際交流センター運営委員会 委員長 糸井 重夫



昨年11月、松本大学が交流協定を結んでいる大韓民国の東新大学を訪問し、松商短期大学部とも交流協定を結ぶことで合意しました。また、12月には、中国広東省の嶺南師範大学を訪問し、松本大学と松商短期大学部の双方と交流協定を締結いたしました。この交流協定を実効性のあるものにするために、平成27年度から双方の大学で短期プログラムを実施することになりました。そこで、2月2日から13日の日程で、「短期日本語・日本企業・日本文化研修プログラム」を試行的に本学で実施いたしました。

このプログラムは協定締結後2カ月あまりで実施されたため、嶺南師範大学の学

生8名のみでの参加となりましたが、日本語の学習に加えて「会計学」や「日本の食文化」等の講義も受講しました。さらに、茅野市に本社のある株式会社イースタンや外国人に人気の野猿公園などを見学し、温泉や茶道、「ラート(Rhönrad)」ヤソリなども体験しました。また、本学の国際交流クラブや学友会の学生諸君との交流、地域の人達との交流も行われ日中双方の学生にとって有意義なプログラムとなりました。

また、3月4日から1週間の日程で実施された嶺南師範大学の「短期海外研修」には2名の学生が参加し、午前中は中国語のプライベートレッスン、午後はアクティビティと学生交流、週末は世界遺産見学など充実した研修を行いました。

さらに、このような学生交流のプログラムに加えて、2月には、本学の短期プログラムに合わせて嶺南師範大学の体育科学学部の章暁霜学部長と長文良准教授が来日し、松本大学の人間健康学部との連携

に向けた協議を行うと共に、学内視察を行いました。また、3月の嶺南師範大学での短期プログラムに合わせて、人間健康学部の等々力賢治学部長が嶺南師範大学体育科学部を訪問し、連携に向けた協議を行いました。

少子高齢化が日本よりも早いペースで進むことが懸念される中国社会にとっては、治療後のリハビリテーションに加えて病気を未然に防ぐ予防医学的な視点が重要であり、本学の健康栄養学科の知見やスポーツ健康学科の取り組みがきわめて有効であるとの判断が中国側にあり、学術交流が加速することになりました。

今回、初めて短期の日本語プログラムを実施したわけですが、このような日本語プログラムを通して学内の国際化を図り、海外に目を向ける学生を少しでも増やすとともに、協定校で実施される短期プログラムに参加する学生を増やしていくことで、本学のグローバル化を進めていきたいと考えています。



人権とは“生きづらさ”に気づくこと

人権委員会 委員長 犬飼 己紀子

2月4日、福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任准教授・天野和彦氏を講師に迎え、「そもそも人間って何?」と題して本学教職員対象の人権(ハラスメント防止)研修会を開催しました。天野氏は、2011年3月に発生した東日本大震災における福島県最大の避難所となった「ビッグパレットふくしま」の県庁運営支援チームの責任者として携わった体験から、避難所での日々は毎日が「人権」と向き合う営みであったこと、避難所生活で一人の自殺者も出さなかったことは、奇跡などではなく交流・自治・想像力などの賜物であったこと等、熱く語っていただきました。

研修開始早々、「体験して初めて見えてくることがあります。ワークショップに参加いただくことで、この後の話をより深く理解いただけます。」と前置きして投げら

れた課題、『あなたが避難所の運営者だったら』に向かい、参加された教職員の活発な討議が始まりました。8つのグループそれぞれが話し合った内容を全体でシェアしたところで、本題の講話に入りました。天野氏は、避難所で次々と起こる問題に対し、今ここで何が起きているかに気づかないまま問題解決しようとしていた自身の管理的姿勢を失敗例に挙げ、「想像力」が重要だと話されました。

被災地や避難所で起こった事実を映像と音楽とでつ

なぎ、参加者の感情に揺さぶりをかけながら、「人権とは生きづらさに向き合う問題であり、避難所での体験は『生きづらさ』から人々を解放する営み、つまり、毎日が『人権』と向き合うことでした。」と講話をまとめられました。

今、豊かで平穏な日常のどこかで起こっている「生きづらさ」に気づいていくこと、そこに人権意識の高い組織集団に向けた一歩があると学んだ研修でした。



食による地域活性化

本学の観光ホスピタリティ学科や健康栄養学科では地元自治体や公的機関、教育機関、民間企業などと連携し、地域の活性化を目的に、地元の農産物を使った特産品やメニュー、新しい商品の開発に取り組んでいます。



「地産地商」目指し 信州松本鍋を開発

観光ホスピタリティ学科 教授 白戸 洋

「松本は豊かな食材が豊富にあるが、それを活かして提供する機会も場所も少ない」という声をもとに、本学白戸ゼミは松本の食材を活かした食の開発に取り組んでいます。平成25年にJA松本ハイランドや松本市とともに開発した駅弁は「城下町のおごっつお」として結果を出し、人気駅弁として販売されています。その成果を踏まえて平成26年度に取り組んだのが、冬の定番「鍋」の開発です。駅弁が「地産地商」として農産物の周知を目的とするならば、鍋は「地産地商」、すなわち消費拡大を目

指す取り組みでした。

りんご、長芋、ごぼう、松本一本ねぎなど松本を代表する食材を組み合わせるとともに、調理方法や食べ方にどう松本らしさを出すかが最も大事なテーマとなりました。9月からJA松本ハイランドや松本市の方々とワークショップを繰り返して鍋のコンセプトや食材の検討を行いました。10月からは丸正醸造や本郷鶏肉、居酒屋一步など専門家にも加わって頂き、試作を通じてメニューを絞り込む作業に入りました。その中からすりおろしたりんごとポン酢を合わせたタレを

使うことや巾着の中に長芋や山賊焼を入れ特徴をだすこと、きりたんぽのように食べる薩玉ご飯を入れることなどのアイデアが生まれ、12月に鍋が完成しました。

今回は家庭や地域で広く食べていただくために、12月から2月までの毎月19日を日本記念日協会に「信州・まつもと鍋の日」として登録するとともに、公民館での料理教室、鍋セットのスーパーでの店頭販売など、開発以上に普及活動に力を注いでいます。是非松本のおいしい冬野菜を使ったご当地鍋を楽しんで頂きたいと思ひます。

6次産業推進事業 さまざまな商品に

健康栄養学科 専任講師 矢内 和博

本学健康栄養学科が安曇野市商工会などと連携して開発した「信州アルクマそば」の発売から1年4カ月がたちましたが、おかげさまで、今までに約27万食販売することができました。また、3月には北陸新幹線延伸に合わせ、第2弾「アルクマそばバウム」を発売しました。



農林水産省の補助事業として約4年間、6次産業推進事業に取り組んできましたが、結論は「もちは餅屋」。つまり地域活性という志を持った仲間が集まり、チームを組んでそれぞれの得意分野を実践していくことが大事、ということでした。我々のチームは、松本大学、安曇野市商工会を軸として、安曇野市役所、株式会社まるたかグループ、JR東日本長野支社、斉藤農園です。

本学では新規食品素材の開発を中心に、現在までに「焙煎そば粉EX」、「ワサビ葉ペースト」、「刻み葉わさび」の3品の商品化を行いました。また、生産工場の設

立、生産技術開発、品質保証等の、一般の食品メーカーで行う業務も学生とともに取り組んできました。これらの商品は、現在までに「わさびコロッケ」「わさび豚まん」「蕎麦まんじゅう」、「わさびポディーソープ」などに採用されています。

我々のチームは今後も仲間を増やし、成果を上げていくことと思ひます。なぜなら、本気になって地域活性化に取り組む人の集まりだからです。来年度は、これらのツールを生かし、安曇野市掘金の斉藤農園を観光拠点として整備する「アルクマ農園構想(仮称)」に取り組みます。地域活性化だけでなく、雇用創出にもつながるように全力を尽くしたいと思ひます。

寄稿

株式会社 信栄食品

丸山 有紀 塚原 絵里

健康栄養学科(廣田ゼミ・矢内ゼミ)を卒業し、松本市の株式会社信栄食品で冷凍餃子の製造・販売をしています。このほど、私達を中心となって開発に取り組んだ「ままといっしょになかよし餃子〜あか・き・みどりのなかまたち〜」が、千葉市で開かれた「FOODEX JAPAN」で、小さな子供を持つ母親が選ぶ「第1回「FOODEX美食女子」ママの愛グランプリ」で、最高賞であるグランプリをいただくことができました。

国産の豚肉・野菜・小麦を使用し、化学調味料・保存料無添加であることから「安心して子供に食べさせられる」と高く評価され、応募総数59社83製品の中から選ばれました。にんじん、かぼちゃ、ほうれんそう、にらといった4種の緑黄色野菜を使用し、野菜を食べる習慣をつけ、元気に成長してほしいと願う母親の思いが詰まっています。

今後も健康栄養学科で学んだ知識や経験を生かし、消費者のニーズに沿った商品を開発していきたいと考えています。



卒業研究・卒業論文発表会

大学4年間、短期大学2年間の研究活動の成果を発表する「卒業研究・卒業論文発表会」が各学部、学科において行われました。

総合経営学部 総合経営学科

バラエティに富む 「精鋭」10名の発表

総合経営学部教務委員 教授 田中 浩

昨年12月19日、今年度の総合経営学科卒業研究発表会が行われました。総合経営学部では、「卒業研究」は研究意欲の非常に高い一部の学生だけが履修する選択科目で、今年度は36名の学生が履修し、自身の学生生活の集大成として卒業論文を作成しました。そして、その36名の中でもこの日の発表を許されたのは10名だけであり、まさに「精鋭」と言えるでしょう。



会場には、卒業研究を履修しながらも残念ながら発表できなかった同級生のほか、先輩の発表を聞きたいという下級生、指導教授など50名以上が集まり、さらに報道のカメラも来ていたので、発表す

る学生はとても緊張している様子でした。

ここで発表の詳細をレポートすることはできませんが、オーソドックスな文献研究を中心しつつ新たな論理構成を試みる研究、コンピュータウェブ上のビジネス開発に関わる研究、独自のアンケート調査の結果から何らかの意味を読み解こうとする研究、とバラエティに富む発表でした。

発表時間10分、質疑応答3分という短時間で研究成果をプレゼンテーションすることは非常に難しいのですが、発表者は入念に準備をしており、また予定時間を延長するほど下級生からの質問も多くあり、これまでにない充実した発表会でした。

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
中神 達也	兼村	警察組織から学ぶ権限委譲のあり方
吉江 雄貴	兼村	産業社会学から学ぶ労働と組織のあり方
下澤 一成	小林	ドロップシッピングを利用したネットショップの作成
市田 祥子 大山 奈緒	上野	男性が望む女性の働き方 ～夫が変われば妻は喜び～
斎藤 椋 田邊 浩之	上野	学生が考えるブラック企業の定義 ～企業が行うべき人事管理と政策への提言～
宮下 三広 宮田 和希	葛西	松本大学における課外活動に関する本学学生の実態調査

総合経営学部 観光ホスピタリティ学科

継続的研究と新規研究 バランスよく発表!

総合経営学部教務委員 教授 尻無浜 博幸

今年度の観光ホスピタリティ学科の卒業研究発表会が12月19日に開催されました。発表会場は、ゼミ関係者と後輩で満席の状態でした。

教養分野でいつも堅実な研究を展開しているのが畑井ゼミで、今年度は、若者のワーク・ライフ・バランスについての発表がありました。また斬新な分野に鋭く切り込んで研究しているのが益山ゼミで、今年度は、学生の恋愛観と結婚観についての内容でした。

研究発表会に参加して一番感じたことは、継続して取り組んできた研究の発表が目立ったことです。継続性を重視したものとして、佐藤(博)ゼミの木曾郡の妻籠宿を拠点とした観光分野の研究、また増尾ゼミの松本市街地のバリアフリー調査、白戸ゼミの土上商店街を拠点とした地域分野の研究がありました。代々にわたる研究

の積み重ねが容易に分かる内容で、大変聞き応えがあるものに仕上がっていました。

新規に取り組んだものとしては、山根ゼミの男性長寿日本一の北安曇郡松川村の研究、また尻無浜ゼミの生活困窮者を扱った生活分析研究がありました。

来年度からゼミナールの履修設定が大きく変わろうとしています。あわせて卒業研究への学生のアプローチも変化することでしょう。日々の学びを基盤とし、若者らしく大胆に研究に臨んでほしいと思います。

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
須澤 利貴 滝澤 真梨 丸山 珠央	益山	現代の日本人の出会いと結婚に関する意識 松本大学の学生の恋愛観と結婚観に関する意識調査より
松本 尚子	尻無浜	「生活困窮者実態把握調査」から見てくる生活困窮者の生活分析について
青柳 志穂 上原 優貴 上條 翔子 佐伯優理子	畑井	若年者の求めるワーク・ライフ・バランス施策
大谷あずみ 他6名	佐藤	「生きた」妻籠を残すために 住民の声から見てくる、課題解決への提案
岩佐 里穂 他8名	山根	男性長寿日本一松川村 ライフスタイルの考察
小栗 藍 他9名	増尾	松本市街地のバリアフリー調査 ～観光地周辺の調査とルート提案～
小松 綾奈 他8名	白戸	商店街の活性化とひとつづくり ～商店街の新しい役割とは～

学生主体の発表会で活発な意見交換

人間健康学部教務委員 専任講師 藤岡 由美子

12月23日の健康栄養学科の卒業論文発表会では、形式を大幅にリニューアルしました。これまでの教員主導から学生主体へ方針を転換し、4年生が発表に専念できるよう、前日までの準備や当日の進行は、3年生が担当しました。



各研究室から運営委員を選出し、抄録集の印刷、受付や司会進行、開会・閉会宣言、送辞、スライドと照明、質問のマイク担当に振分けました。13演題に及んだオーラルプレゼンテーションでは、学術総会に準じて各研究室の後輩が座長を担当し、発表後の活発なディスカッションをサポートしました。46演題に及んだポスタープレゼンテーションでは、2部制を取り、発表者がポスターの脇に立って質疑応答を行いました。

内容は、基礎的な研究から実践的な活動報告まで、例年バラエティに富んでいることが特徴的ですが、同じ研究室の後輩や座長からの活発な質問により、内容がより詳細に掘り下げられました。教員からは、今後の研究の方向性についての指摘がなされ、後輩達に引き継いでいくことが期待されました。当日は、2年生が研究室の配属を選択する上で、研究に触れる機会を兼ねたことから、真剣に聴講していました。1年生

からの参加希望もあり、抄録集は初めて全学年に配布しました。

4年生の挨拶や答辞では、指導教員や3年生への感謝が述べられ、それぞれの記憶に残る会となりました。

氏名	ゼミ	卒業論文テーマ
畔上 千佳	小西	大学生における食習慣・生活習慣と精神的健康度との関連—抑うつ症状および非定型うつ症状—
山崎知房 山下 陽平	進藤	種々の収縮条件による運動細胞の活動性の変化
丸山 優香	福島	食のグローバル化から見る日本食
片桐あづみ 小林 寛菜	矢内	健康に寄与するための餃子の開発
市川 美沙	伊藤	栄養教育と学校給食について—ヨーロッパの事例を通して—
和田茉莉美	山田	TGF-βによるSHARPファミリー遺伝子発現調節機構の解析
大川 絢菜 福原奈都紀 藤森 美帆	高木	6-MSITC による糖新生生酵素PEPCKの発現調節機構の解析
小井土美希	廣田	大学女子ソフトボール部における栄養教育が知識の習得と身体及びメンタルにおよぼす影響
小池 美紀 宮下あゆみ	成瀬	登山者の食事調査と山ごはんの提案
井口未奈子 下沢沙也加 唐沢 夏生	杉山	食の安全・安心確保の推進に関する調査研究
柏原 麻祐 小林 有希	石原	寒天ゲルの物性に及ぼす牛乳とその成分の影響について
小林亜里沙 徳高 美琴 三宅 郁恵 村山 綾菜	沖嶋	長野県松本市ならびにその近郊で販売された大豆製品における遺伝子組換えダイズLLSおよびRRS2混入状況の網羅的調査
村山 武弥 西澤 斗礼	藤岡	実践的な臨床栄養活動を通した社会人基礎力の育成患者交流会の企画運営と栄養ケアプロセス

人間健康学部 スポーツ健康学科

多様なテーマでスポーツを学究する1日

人間健康学部教務委員 准教授 岩間 英明

1月10日、スポーツ健康学科の卒業論文発表会が開催されました。“スポーツは総合科学である”ということを再認識させられるのが、このスポーツ健康学科の卒業論文発表会です。発表会で93名が提示したテーマの多様性は、物事を柔軟に幅広くとらえることができる若者の感性さ



のものであり、新鮮さ、うらやましさを感じました。

課題を見つけ出し、追究し、慣れない論文にまとめ上げることは、学生諸君にとって苦しいことだったでしょう。

しかし、それを乗り越えて一つの結果を導き出したということに、大きな価値があると私は考えています。

発表会を終えて研究室に戻った時、ある学生が「もっと、(自分の研究を)深めたかったなあ」とポツリとこぼしました。こんな思いに駆られた人は、きっと他にも大勢いたことでしょう。この言葉こそが、学びが学びを生んだ瞬間なのだと思います。

卒業研究は『未完の完』です。学ぶことにゴールはありません。4月から新しい世界に踏み出す4年生諸君には、これからも自らのフィールドで学び続けて欲しいと思います。

今年もまた、たくさんの意見や質問が飛び交うスポーツ健康学科らしい熱い卒業論文発表会となりました。ご指導いただいた先生方、熱心に聴いてくれた2年生、支えてくれた3年生、そして誰よりも発表してくれた4年生、みんなに感謝したいと思います。

氏名	ゼミ	卒業論文テーマ
石井 良	等々力	指導者の体罰問題—体罰の現状とこれから—
志尾本拓人	岩間	バスケットボールにおけるファーストブレイク(速攻)を成功させる条件についての研究
科野 拓也	犬飼	幼児期の人との関わりはその後の社会性に影響を及ぼすか
高橋 香織	田邊	女子学生における短期間の運動が体組成および脚筋力に与える影響
西村 愛美	根本	ラート直転は歩行運動のエネルギー消費量に匹敵するのか
橋爪 聖人	中島弘	保育支援方法の変化が園児の運動能力向上に及ぼす影響について—M市F保育園年長児を対象にして—
池本 安那	中島節	読まれる保健だよりとは—保健だよりの読誌状況と受け止め方の実態—
小岩 侑里	等々力	日本武道の国際化—失われゆく日本の文化と伝統—
小林 昂太	中島弘	運動支援の変化が園児たちの歩数に及ぼす影響について—登園後の外遊びと運動遊び介入に着目して—
嶋村 恵太	田邊	介護付き有料老人ホームにおける運動プログラムが立ち上がり動作に与える効果について
宮沢 幸恵	岩間	初心者におけるダンスのノリについて
村松 萌	根本	歩行時の腕振りと手の握りが上肢筋群及び歩幅に及ぼす影響
北村 桃香	田邊	エナジードリンク飲料摂取による筋力パフォーマンスの影響について
篠田江梨奈	等々力	我が国におけるスポーツとメディアのあり方—高校野球の魅力はどこからくるのか—
角田 啓輔	岩間	高校野球における送りバントの有効性について
中川 雄大	大窄	公共施設および公園等の脱タバコ対策に関する研究—滋賀県湖西地域及び湖北地域を中心に—
細川 光貴	三村	登山は階段昇降よりよるかにエネルギーを消費する
山越 菜奈	齊藤	大学生競技者はどのような思いで競技スポーツを継続してきたのか?
市川 健人	呉	卵巣摘出ラットにおける高強度間欠的スイムトレーニングとエストロゲン投与が身体組成に与える影響
北澤 拓也	根本	年齢層の違いによる握力と脚伸筋力の関連性の検討
小山 義明	齊藤	サッカーの試合展開はPK戦の結果にどのような影響を与えるのか?
富沢 優夢	等々力	スポーツメディアの発展—インターネットがスポーツメディアに与える影響—
森下 和樹	江原	大学生の生活習慣について
吉田 昇平	吉田	オリンピック種目に関する研究 空手はなぜオリンピック種目にならないのか

松商短期大学部

努力を重ねた2年間の
ゼミ活動成果を発表

松商短期大学部教務委員 教授 浜崎 央

短期大学の「卒業論文発表会」が、1月21日に開催されました。短期大学部では、1年生から自分の興味に合わせて卒業までのゼミナールを選択しています。そのゼミ活動の2年間の成果は、卒業論文として全員がまとめ、ゼミを代表した数組の学生たちが、次年度卒業論文に挑戦する1年生の前で発表しています。



今年度も、8つのゼミの代表者(9組)がそれぞれ自分たちの卒業論文の内容をプレゼンテーションしました。17のフィールドを擁する松商短大ならではの、多岐に渡る卒業論文のテーマやバラエティに富んだ内容に、学生も教員も大いに楽しませてもらいました。特に川島ゼミの発表では、『ニュースポーツの開発』をテーマに、体育が得意ではない人でも参加できる新しいスポーツを、今ある競技を分析しながら開発していました。実際にそのスポーツを行ってみせ

る発表では、時々歓声が上がリ、聞いている人も興味を持って引きこまれている様子が見られました。

すべての卒業生が努力を重ねて、この卒業論文を完成させており、その苦勞の分、自信を持って社会に羽ばたいてもらえるのではと期待しています。

氏名	ゼミ	卒業論文テーマ
五十嵐史圭 河田 美穂 渡邊 彩美	藤波	恋愛に求める条件
丸山 美月 平林 沙樹	浜崎	Flashを利用したWebコンテンツの作成
村山 裕菜 中村 麻莉	中村	日本の給食を世界の給食と比較して、その特徴と課題を明らかにする
細田 佳代	木下	本田技研工業株式会社の経営分析
小口 佳弥 望月 美砂	篠原	自分史とゼミの活動内容
山本紗矢佳 五味ありさ 両角 愛華	矢野口	スクラッチプログラミング言語を使ったゲーム制作
伊藤 礼奈 太田 伶奈 山崎 美香	川島	睡眠時間が作業能力と反射神経におよぼす影響
村田 力希	長島	テレビCMから考える法律問題
カーター二希 坂田 涼 橋本 翔汰 三井 直哉	川島	ニュースポーツの開発

大学院修士論文審査発表会

小さな大学院、大きな研究

大学院健康科学研究科 准教授 呉 泰雄

平成26年度の修士論文審査発表会が2月16日に開催されました。今年度は4名の発表者のうち、3名が社会人でありました。私の研究室の大学院生は現役が1名と社会人が2名でした。今回、特に多い社会人の方々のご自身のお仕事をしながら修士論文を書き上げたことは、とても大変な作業だったと推測できます。実験・アンケートなどを何ヶ月間も行ったあと、そのデータを整理し、今までの研究結果とどのような関係があるかなどのストーリー性をもった論文を書き上げるには、沢山の時間が必要とされるからです。



今年度の発表会の研究テーマは様々で、4名しか発表していないのにとっても沢山の

研究内容を聞いた錯覚までおきました。今回発表された院生らは時間がもっとあればより良い論文が書けたと思っているかもしれませんが、修士の学位を取ったのが終着点ではなく出発点であることを理解して、今後の研究活動に役立てられればいいと思います。

皆さん、お疲れ様でした。最後に以下の質問をして私の感想とさせていただきます。「研究は順調に進みましたか。」「研究で印象に残ったことは何ですか。」「研究発表を終えての感想は?」「今後の抱負と後輩へのメッセージもお願いします。」

発表者	指導教員	論文タイトル	
大久保早苗	呉	男女高校生クロスカン트리スキー・スピードスケート選手の栄養摂取状況と食習慣の実態調査	Situations of Nutrient Intake in High School Cross-country Skiing and Speed Skater
小池 泰子	三村	外科手術後のQOLは大腰筋量に依存する	Psoas muscle volume is a major factor affecting QOL after surgery
小市 健二	呉	介護予防事業(1次予防)参加者における身体活動量と生きがいへの影響因子—生活時間調査との関係—	The influence factor to a physical activity and IKIGAI in a preventive program for the elderly
田中さくら	呉	卵巣摘出ラットにおける高強度間欠的スイムトレーニングが骨に与える影響について	Effects of high-intensity swimming training on Bone in Ovariectomized rats.

キャンパスを飛び出し
地域を学ぶ!

アウトキャンパス・スタディ

out campus study

▶ 生坂小学校での紙芝居公演

観光ホスピタリティ学科

学科長・教授 増尾 均

2月16日に生坂小学校で加藤正治博士の紙芝居を公演しました。この紙芝居は、昨年に続き2回目の公演になります。生坂小学校の1年生から6年生までの約70名の児童が見に来てくれました。20分に渡る紙芝居ということもあり、少し長かったのですが、飽きずにみんな楽しんでくれました。

この取り組みは、2013年3月、生坂村教育委員会から本学に同村出身の加藤博士を用いて小学生を対象に地域教育を行いたいとの依頼が来たことから始まりました。当初、ゼミ生から「加藤博士の経歴を考えると小学生には難しいのでは」との声も有りましたが、生坂村教育委員会と幾度かの話し合いの結果、紙芝居ならば現代っ子にとっては珍しく楽しみながら伝わるのではないかということになり、この連携事業がスタートしました。ゼミでは、2度の生坂村合宿を行い、資料館での資料収集、前教育長の講義、村内の加藤博士に関する場

所の調査などを行いました。また加藤博士が毎日生坂村から急峻な山を越えて8km先の池田小学校まで通っていたことから、ほぼ同じ道を歩くなどさまざまな体験もしました。

加藤博士は明治4年に生坂村で生まれ、長野県中学(現松本深志高校)から第一高等中学を経て東京帝国大学を卒業後、同大学教授・法制審議会委員・枢密顧問官・中央大学初代総長などを歴任した方です。博士は、法律学者と俳人の2つの顔を持つ方でした。そこで、昨年は1作目ということもあり、児童にとって分かり易いように、幼少期に勉学に励み後に中央大学初代総長になるまでを紙芝居にして公演しました。なかなか好評でした。今年は俳人



としての加藤博士を題材にしたシナリオを元に紙芝居を作成しました。俳句を犀水といい、2万句以上の俳句が残されており、生坂村はもとより周辺市町村にも多数の句碑が見られます。松本市にもあります。紙芝居は今回の公演で一区切りとなりますが、この活動を契機に生坂小学校と更なる連携事業を計画しています。

▶ 机上では養えない実践力を

スポーツ健康学科

教授 根本 賢一

私たちのゼミナールでは今年度も、松本市の「熟年体育大学」と「ピンキラ☆健康づくり教室」、諏訪市の「カラダ改善セミナー」、安曇野市の「あづみのピンキラ体操教室」、南箕輪村の「自分みがきプロジェクトてくてく塾」、筑北村の「キラリアクア健康教室」や池の平ホテル&リゾーツなど多くのフィールドで、それぞれで結んだ連携協定に基づいて、運動指導を中心とした健康づくり教室や講座を実施しました。

学生たちに、学外(アウトキャンパス)で、学内(インキャンパス)で学んだ知識や技術

を用いて実際に指導させると、「専門知識が十分に習得できていないこと」や「相手に伝えることの難しさ」など、自らの課題を実感して戻ってきます。それによって、その後の学生の学ぶ姿勢や意欲が大きく変化するのが、私たちは毎年経験しています。

健康のために運動が必要なことは、多くの人が理解しているものの、なかなか実行できないのが実情です。「平成24年国民栄養調査」によれば、20歳以上で運動習慣のある(1回30分以上の運動を週2回以上実施し、1年以上継続している)者の割

合は、男性約36%、女性約28%に過ぎません。そうした状況であるからこそ、科学的根拠に基づいた指導や運動の必要性を伝えることが重要なのです。そして、「カラダを動かす心地良さや楽しみ」を付加しながら指導できる人材が必要であり、求められています。

学生が指導をした講座終了後に、受講者からよく手紙をいただきます。「半年間の講座でしたが、毎回学生さんに出会えるのが楽しみでした。…中略…学生さんたちの優しい気持ちが本当に嬉しかったです。現在で



は、友人とおしゃべりをしながら歩くことも継続しています。良い指導者を目指して頑張ってください」。こうした感謝の言葉が、学生の学びを励ましさらなる飛躍へと導くだけでなく、学生を指導する私たち教員を勇気づけていることは、あらためて述べるまでもありません。



話と和と輪、想像と創造の空間 地域づくり考房『ゆめ』

地域づくり考房『ゆめ』専任講師
福島 明美

地域づくり考房『ゆめ』は、地域人としての自覚や人間性を養う学びの場であり、活動実践を通して自立した人づくりをめざしています。学生と地域をつなぎ、地域を“共有”の場として、学生・地域それぞれの立場でともに地域づくりを考えます。学生は、大学で学んだ知識や技術を地域づくりの中で実践的に活かしていきます。今回は2月28日、3月1日に開催された、子どもたちが創り上げるまち「あるぷすタウン」の活動を紹介します。

子どもだけのまち 『あるぷすタウン』

地域づくり考房『ゆめ』主催、あるぷすタウン実行委員会企画・運営により、本学を会場に大学COC事業の一環として開催しました。

「あるぷすタウン」は、子どもたちが運営し創り上げていく、子どもだけのまちです。本物の仕事をプロの方に指導していただき、実際の仕事に触れ、給料を稼ぎ、税金を納め、残ったお金は自分の好きなように使う、また、市長・議員選挙を行い、社会システムの基本を知ってもらうという取り組みです。平成26年7月から1～3回の実行委員会を開催し準備を進めてきました。メンバーは、本学学生15名と社会人15名です。

当日は、2日間参加可能な中南信の小学4年生～中学3年生の計160名が参加しました。また、中南信地域の高校10校と、本学学生、専門家を含む社会人、総勢2日間延べ659名が当日ボランティアスタッフとして活躍しました。

あるぷすタウンには、官公庁街(ハローワーク、税務署、銀行、選挙管理委員会、市役所、消防署、警察署、病院、博物館)、商店街(食べ物屋、雑貨屋、花屋、写真屋)、サービス業(清掃会社、交通機関)、メディア街(ラジオ局、インターネットテレビ局、新聞・イラスト関係業者)、職人の街(板金屋、大工、植木屋)、マナーの22ブースが開店。また、お金を消費する学びの



場「アカデミー」は、松本雛(七夕人形)、染め物、松本の伝統工芸みずび細工、信州産ヒノキのマイ箸づくり、ストラップ作り、ペーパーラフト、デザインピース、道化師、鳥・甲虫・蝶の生態、天体、健康吹き矢といった11講座を開講し、各々専門家に指導にあたっていただきました。さらに考房『ゆめ』学生プロジェクトが「カルチャー」のオリジナルプレスレットづくり、手話体験、スプレーアート、レシピ作り、迷路クイズ、松大ピックの7講座を開講しました。

また子どもたちがチームを組んで、それぞれが工夫して起業し出店したブースは「宝くじ店」「アクセサリー店」など9店舗。専門家による創業支援を受けて、自宅から持ち寄った品物やスタッフに依頼した準備品で、楽しいお店が出来上がりました。

社会の仕組み学び大盛況 来年に向け抱負も

当選した市長や議員のみなさんから、来年に向けて「今年は、仕事が少なかったという意見が出ました。来年は、仕事に対して充実感ややりがいを持てるようなまちにし、みんなが交流し、仲良くなるイベントを開催しま

す」との抱負が最後に発表され、みんなで共有しました。選挙の投票率は90.4%でした。

6年生の参加者から「私が体験したのは、交番・写真屋・駄菓子屋・アカデミーの宣伝・大工などの仕事やお買い物・選挙・納税です。どれもなかなか子どもでは体験できないもので、大人になったみたいでうれしかったです。～中略～ぜひ、第2回あるぷすタウンも開いてください!!」との手紙が実行委員会宛に届きました。

また、高校・大学生の皆さんからは、「普段自分たちが中心に活動していますが、子どもたちが主体的に行動できるよう出来るだけ口を挟まずにサポートしたり、見守ることの難しさを感じました。」との感想が出て、子どもたちが考え、行動出来るための環境づくりや支援のあり方についての学びは大きかったようです。高校生の窓口としてご協力いただいた先生からは「勉強と部活に忙しい生徒が多い学校ですが、生徒たちにどんどん参加するチャンスを与えていくことの大切さを再認識させられました」とのメールが届きました。



専門家の方からは「子どもたちが、いきいきと真剣に仕事をしている姿に、こういった機会を提供することの大切さややりがいを感じた。」といった意見を多くいただきました。

子どもたちは、協力しながら自分たちでまちを創ることにより、社会の仕組みを知り、子どもの頃から地域に関心を持つきっかけとなるとともに、異年齢間の子どもの交流を通して、地域社会で必要とされるコミュニケーション力を養っていました。また、高校生や学生は、社会人とともに子どもたちが楽しんでまちを創るためのサポートや企画運営を行うことで、社会人基礎力を身につけ社会の担い手としての自覚を育む一歩となりました。

*当日の様子は、地域づくり考房『ゆめ』のHP、「あるぷすタウンブログ」をご覧ください。@?



地域の健康づくりを支援する 地域健康支援ステーション

地域健康支援ステーションでは、地域の健康づくりを栄養と運動の両面からお手伝いしています。最近の活動を紹介します。

管理栄養士スタッフ 飯澤 裕美
健康運動指導士スタッフ 赤津 恵子

食育 SAT キャラバン隊 活躍しました



県内各地域で様々な食育イベントが開催されていますが、今年度は、諏訪地域と木曾地域の食育イベントに参加しました。ステーションの管理栄養士スタッフの指導のもと管理栄養士をめざす健康栄養学科の2年生と3年生の有志が、実物大のリアルな料理モデルを使って瞬時に食事診断ができる「食育SATシステム」を活用して、来場された方を対象にバランスよい食生活のためのアドバイスをを行いました。

来場された方はカラフルな「料理モデル」の中から自分のいつもの食事に近い料理を選んでセンサーボックスに乗せます。性別や年齢、身長に対応して栄養バランスの判定が行われ、バランスがいいほど星の数が多く表示されます。残念ながら星の数が少ない結果となってしまった方には、バランスよい組み合わせになるように料理の変更をアドバイスします。人により選ぶ料理が異なるので、どのように変更したらよいか判定結果を見ながら即座に判断しなければなりません。「野菜料理をもう一品増やすのはいかがでしょう」などのアドバイスをして組み合わせを変えていただくと、星の数が増えて合格の判定になります。「料理の組み合わせで栄養バランスが変わるのですね」と、参加者はゲーム感覚でより良い食生活への気付きがあるようです。

このように直接住民の方と接する機会は、学生にとって、教室での学びを応用しながらコミュニケーションしていくという難しい場

面となることもありますが、ひたむきに取り組む姿を地区住民の方々は大らかに見守ってくださり貴重な経験を積ませていただいています。このような機会を提供して下さった関係者の皆様と、地区住民の皆様にはこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

少年サッカーチームの 食育講座を開催しました



小学生と中学生が参加する少年サッカースクールの指導者からの要望で、選手とその保護者に対する食育講座を実施しました。要望は、サッカーの激しい試合に耐えるスタミナを養うことと成長期にある選手たちの身体づくりの基盤となる食生活について、選手も保護者も指導者も一緒に学びたいとの内容でした。

子どもたちに、成長期でありスポーツを行う身体にとってバランスよく食べることがいかに重要かを伝えた後、SATシステムを使い自分たちで選んだ料理の組み合わせを診断します。診断結果はスライドで映し出され、皆で見ながら「牛乳が足りない」「野菜料理は何食べよう」と工夫して合格レベルに近づけることができました。「バランスよい食事のお手本は、皆がいつも食べている学校給食だよ」と伝えると、「いつもおかわりして食べているよ」と頼もしい声が返ってきました。

その後は保護者と指導者に、スポーツ栄養の基本について話をしました。参加した保護者のほとんどが、スポーツと栄養の関係についての話を聞くのが初めてということでしたので、スポーツ少年の食生活の心得、間食の摂りかた、練習日に持たせるお弁当のポイントなど具体例を盛り込みながらお伝えしました。終了後に個別に相談される方もあり、同行した学生も熱心な保護者の様子を肌で感じて「スポーツ栄養」という分野の学びについてモチベーションが上がったようでした。

民営宿泊施設で 運動教室を担当しました



塩尻市郊外のJA宿泊施設から、会員を対象にした研修会において「介護予防」の運動指導をしてほしいと依頼がありました。11月から3月にかけて、8回伺いました。毎回30人ほどが参加され、ほとんどが80歳以上の方でしたが、杖をお使いの方を含め、皆さんお元気で、熱心に運動を実践してくださいました。「大往生その日の朝までお散歩めぞう」という題目で、要支援、要介護の原因として最も多いロコモティブシンドロームに関すること、筋肉が命の源であることを重点的に話しました。運動実践は、いつでもどこでもできる、歩行に大切な筋力を鍛えるメニューを提案し体験していただきました。参加者からは、運動は疲れるが大切さが分かった、今日から実行したい等の感想をいただきました。



今年度はこのような施設や公民館などに、延べ46名の学生がスタッフとして活動に参加しました。

精神障害者施設で 運動を指導しました



朝日村の施設から、日ごろの運動不足を解消したいので家の中でいつでもできる運動を指導してほしいと依頼され実施しました。寝転んでテレビを見ながらできる筋トレや、椅子に座った状態で実践できるストレッチ等を紹介し、一緒に実践しました。皆さんから、初めての体験で大変楽しかったとのお声をいただきました。

皆さまのお近くで、学生や専門スタッフ(管理栄養士・健康運動指導士)が
お手伝いできることがありましたら、是非お声をかけてください。

第1回学長表彰に3名の教員



1月16日に第1回学長表彰の表彰式を行いました。学長表彰は教育・研究、社会貢献、学内運営の活性化のために、多大な功績があった本学の専任教員を学長が表彰するものです。今回は3名の教員が対象

となり、住吉廣行学長は表彰状を授与し、記念品を贈呈しました。表彰者は次の通りです。

木村晴壽教授(総合経営学部総合経営学科)、文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に対する取り組み▽岩間英明准教授(人間健康学部スポーツ健康学科)、教職課程履修学生の教員採用試験に対する支援▽金子能呼准教授(松商短期大学部商学科)、アクティブラーニングの実践と推進。
(事務局次長・総務課長 柴田 幸一)

卒友会を開催

教育関係機関に勤務する本学卒業生の会「卒友会」が、12月21日に開催されました。今年度は「卒友会」のメンバーの中から4人の卒業生が教員採用試験に合格したため、その祝賀と、教員採用試験に向けて頑張っている卒業生・在学生の激励、そして情報交換を行いました。

教諭として教育現場に立っている先輩方から、現場の様子や教員採用試験に向けての勉強法等、経験者ならではの話を伺うことができました。

た。教員採用試験合格を目指す参加者にとっては、試験勉強へのモチベーションを高めるよい機会となりました。

(教職センター長 川島 一夫)



長野県「消費生活サポーター」が誕生

総合経営学科の2年生2名が、昨年12月18日、長野県知事から「消費生活サポーター」に認定されました。消費生活サポーターは、消費者被害を防止するため、身近な地域や所属団体等で、啓発や消費者教育を行う「消費生活に関するリーダー」です。



総合経営学科では、2013年度から、自立した消費者・生活者を養成するための「生活マネジメント」のカリキュラムを拡充しました。2人は、こうした学習の過程で、2014年夏に創設された長野県の「消費生活サポーター」に応募し、所定の養成

講座受講を経て認定を受けました。今後、大学内での消費者教育充実に努めるとともに、消費生活サポーターとして活躍する学生が増加するように支援していきたいと思えます。

(総合経営学科 教授 太田 勉)

職員がグローバル体験セミナー

2月3日に、地域に根ざしたグローバルについて考えるセミナー「目指せグローバル!松本大学」を、株式会社AtoZの協力で開催しました。本学の職員が講義、ワークショップを通じてオープンな態度で仲間や家族と接する事(=これは日

本語、外国語にかかわらず大事です)を体感しました。グローバル化の中で、実用レベルで英語を話すのが17.5億人中ネイティブ人口が3.9億人です。つまり英語を使う人の78%がノン・ネイティブ=だから完璧な英語じゃなくていいんです!と講師に励まされて、1人ずつ「通り返りの挨拶」から「好きな食べ物をネタに自己紹介」などに挑戦しました。笑顔、アイコンタクトなど普段の基本がおろそかになっていないかのセルフチェックをする場となりました。

(管理課長 白井 健司)



念願の女子ソフトボール部寮が完成

学生課長 丸山 正樹

3月3日に、本学女子ソフトボール部寮の新築工事竣工式が行われました。神事は、玄藩稲荷神社を祭主として行われ、学校法人松商学園・藤原一三理事長をはじめとした大学関係者と女子ソフトボール部員の代表、また設計者、工事関係者など約30名が列席しました。

建物は、木造2階建て、延床面積424.40㎡で、冷暖房完備の28室の個室を設けました。設備としては各部屋に机・椅子・ベッド・クローゼットがあり、1階には大浴場と食堂を、また各階にミニキッチンを設置しました。

女子ソフトボール部は、平成18年に本学の強化部として創部以来、北信越地区では敵なしの9年連続全日本大学ソフトボール選手

権大会に出場するほか、長野県代表として全日本総合選手権などでも優秀な成績を挙げています。3月より新たな寮での生活が始まりますが、さらに気を引き締め、全国大会で「松本大学女子ソフトボール部」の名を掲げ、活躍することを期待します。



部活動情報 Club・Circle

硬式野球部

少年たちに楽しく野球指導

硬式野球部 部長 白戸 洋

硬式野球部の2年生が1月に「社会活動」の講義の一環として、中信地区のリトルリーグの選手を対象に「少年野球教室」を開催しました。実際にリトルリーグの練習に参加して現状を把握することから始め、何度もグループワークを行い、練習メニューを考案しました。4回で計150名を超える子どもを対象に、手つなぎ鬼ごっこなどコミュニケーションを重視したメニューも取り入れて指導し、子どもからも監督からも、またやって欲しいという評価を頂きました。「少年野球教室」は、単に野球を子どもに教えることにとどまらず、監督との連絡・調整も学生が全て行なうなど、すべて自



分達でマネジメントする初めての経験ともなりました。「人に教えるほど学びになる事はない」と言いますが、これからチームの中核を担う彼らにとって大変貴重な経験になりました。「お兄ちゃんの試合、応援に行くからね」子どもからかけられたこの言葉が一番の収穫となったのではないのでしょうか。

スキー部

世界に挑み続ける岩淵選手

スキー部 部長 齊藤 茂

本学スキー部に所属する岩淵香里さん(スポーツ健康学科3年)は今シーズン、スキージャンプ女子日本代表のメンバーと



して、世界に挑み続けています。今シーズンの成績は、1月24日にドイツのオーベルストドルフで開催されたノーマルヒルの12位が最高ですが、すべてのW杯で30位以内に入り、安定感のあるジャンプを見せてくれていました。

本人が最大の目標と位置づけていたノルディック世界選手権大会では、残念ながら36位に甘んじてしまい、2本目にも進むことができませんでした。この大会に懸けてきただけに、本人から出てくるのは反省の弁ばかり。非常に悔しがっていました。今シーズン、残すはノルウェーのオスロで開催されるW杯最終戦のみとなりました。引き続き、誠実に戦う姿を応援していきたいと思います。

(※W杯最終戦の結果は29位、個人総合順位は26位でした。)

退職のあいさつ

本年度で5名の教職員が
本学を退職することになりました。

5年前のエイプリルフル

三村 芳和



5年前のエイプリルフル。引越越し荷物で戦場の瓦礫と化した部屋から夕陽に染まった槍の穂先が目に入った。前日の夕方、東京での残務整理が長引いて、「定年で辞める日は昼に蕎麦を食べよう」との約束を実現させ、親友と神田でツルツルしてた。長かった東京ともいよいよお別れだなと決意。松本大学は新世界だった。そしてこの3月末日。ポクは蕎麦を舌鼓しながら、つぎの出口に向かおうと思う。皆さま、お世話になりました。

(大学院健康科学研究科 研究科長・教授)

観光の学びの種をまく

佐藤 博康



大過なく12年が過ぎ、松本大学において定年を迎えることとなりました。観光という新しい学びの種を松本の地にまくことで与えられた使命を果たせたものと考えています。松本大学卒業生の数も増え、各所で出会うことも多くなってきました。人と人が出会い、互いに学びあう、そのような土地柄であり続けてほしいと思います。松本大学はその中心にあって、新しい時代を切り開く道標でありつづけてください。お世話になりました。(観光ホスピタリティ学科・教授)

自由なはずの单身生活

長島 正浩



2009年、「自由に憧れ単身でやって来た。以来、皆さまのおかげで自由に仕事させてもらった。唯一、セミダブルベッドを買ったことだけは後悔している。退職にあたり、森鷗外「青年」の一節が浮かんだ。「小学校の門を潜ってからというもの、一しよ懸命にこの学校時代を駆け抜けようとする。その先には生活があると思うのである。学校というものを離れて職業にあり附くと、その職業を為し遂げてしまおうとする。その先には生活があると思うのである。そしてその先には生活はないのである。」(松商短期大学部・准教授)

心に栄養を頂いた6年間

大窄 貴史



中学時代の恩師から「他者や自分自身の心に栄養を与えなさい」との言葉が、強く印象に残っています。松本大学の6年間を振り返ってみると、教職員、学生そして地域の皆様に支えられ、心に栄養をたくさん頂き、成長させて頂いたと実感しています。この度、松本大学を後にすることとなりました。この地で学んだことを土台にし、他者の心に栄養を与えられるよう、成長を続けたいと思います。6年間ありがとうございました。(スポーツ健康学科・専任講師)

感謝と期待を込めて!

松田 千壽子



電算室や就職室勤務の頃、卒業する学生に手向けの詞として「皆が勉強したい時、戻ってこられる大学にするからね。共に頑張りましょう」と伝えていました。大学開学の時、卒業生との約束の一步を踏み出せたと嬉しく思い、それからは、地域の必需品大学になるのだと学長の指揮のもと、仲間と試行錯誤。まだ今は道半ばですから、これからが楽しみです。今後は、応援団としてエールを送り続けます。半世紀に近い本当に長い期間、楽しく仕事をさせていただき、ありがとうございました。(再任用職員)

駿河攻めルート

信州に転居してくる以前、私は静岡に住んでいた。静岡に居ると、北側に山がそびえている。南アルプスの南端、安倍奥の山々である。そのような地に何年も暮らしていると、不思議なもので、その山の向こうに行ってみたい気になる。あの山の向こうには何かあるのだろう。きっと幸せがあるのではないか。それで松商短大で教員の公募があった時、迷わず応募した次第。

さて松本に住むようになると、今度は南側に山々がそびえている。そこで、今度はどうやって静岡へ行くか、が問題となる。主なルートとしては、三つ。

まず塩尻峠を越えて韮崎に至り、そこから富士川沿いを清水まで南下するルート、いわゆる身延街道である。次に甲府まで行き、山を越えて精進湖を下り、青木ヶ原樹海沿いに朝霧高原を抜け、富士まで南下するルート。かつては中道往還と呼ばれた道だ。そして三つ目は、飯田から阿智～平谷～根羽を通り、三方ヶ原を経由して浜松へ至るルート、かつての三州街道である。

さて度々松本～静岡を往復しているうちに、これらはみな、戦国時代に武田信玄が駿河攻めの折りに行軍したルートであることに気がついた。実際、根羽村には信玄塚

松商短期大学部 教授 松原 健二

がある。1573年に三方ヶ原の戦いで織田・徳川連合軍を撃破して京に上る途上、体調を崩した信玄が甲府に戻ろうとして落命した地である。

近年、自動車道路は長野県内外でも随分と整備され、飯田山本ICができ、浜松方面へのアクセスも良くなった。韮崎から南下する中部横断自動車道も増穂まで延伸して、静岡への所要時間も短縮された。けれど、道路が整備され時間が短縮されるようになった頃には、既に親が存命ではなく、向かう先がお墓であることが、何とも皮肉で、つくづく悲しい。

Information

2015オープンキャンパス 【途中参加・途中退出可】

次の日程でオープンキャンパスを行います。高校生はもちろん、保護者や教員の方もぜひご参加ください。

●短期大学部限定【16フィールド体験ツアー】

【日時】4/19(日) 10:30～15:30(受付10:00～)

【内容】松商短大のフィールド体験、キャンパス見学ツアー、進路・入試・奨学金相談、保護者相談、ランチ無料体験 etc.

●松本大学・松商短期大学部

【日時】5/17(日) 6/21(日) 8/2(日) 8/22(土) 9/27(日) 10:30～15:30(受付10:00～)

【内容】松本大学・松商短大概要説明、学科説明、ミニ講義、体験講座、トレーニングルーム体験、ランチ無料体験、キャンパス見学ツアー、個別相談(入試・授業・資格・就職・学生なんでも相談) etc.

●特別授業公開(全学部・学科)

【日時】7/20(祝) 10/12(祝)

【内容】受験生の皆さんに本学への理解を深めていただくために通常の授業を公開します。



無料シャトルバス運行(7/20,10/12の運行はありません)

長野県内<松本駅、長野駅、上田駅、佐久平駅、岡谷駅、下諏訪駅、茅野駅、伊那(上伊那農業高校前)、飯田駅>・山梨県<甲府駅、小淵沢駅>、新潟県<新潟駅、高田駅>からシャトルバス運行 ※松本駅以外要予約

詳しくはホームページでご確認いただくか、入試広報室までお問い合わせください。

www.matsumoto-u.ac.jp ☎0120-507-200

硬式野球部公式戦の日程

関甲新学生野球連盟
春季2部リーグ戦

※球場が変更になる場合があります。

節	月	日	曜	対戦カード	開始時間	会場
第3節	4	18	土	埼玉大学 - 松本大学	9:00	松本大学
		19	日	松本大学 - 埼玉大学	9:00	
第4節	4	25	土	作新学院大学 - 松本大学	10:00	平成国際大学
		26	日	松本大学 - 作新学院大学	12:30	
第5節	5	2	土	松本大学 - 新潟医療福祉大学	12:30	松本大学
		3	日	新潟医療福祉大学 - 松本大学	10:00	
第6節	5	9	土	松本大学 - 茨城大学	12:30	大原運動公園 野球場
		10	日	茨城大学 - 松本大学	10:00	
第7節	5	16	土	松本大学 - 宇都宮大学	12:30	大原運動公園 野球場
		17	日	宇都宮大学 - 松本大学	10:00	

松本大学 教員免許状更新講習のお知らせ

松本大学では平成27年度、本学を会場に教員免許状更新講習を開催します。本学教員が講師を務め、必修領域1講習と選択領域19講習を開設します。

詳しくはホームページでご確認いただくか、
本学教員免許状更新講習支援室までお問い合わせください。

tel.0263-48-7260 email : menkyo.koushin@matsu.ac.jp

編集後記

昨年の4月から広報の仕事に携わり、あっという間の1年でした。私自身この仕事を通して、松本大学を中心に展開されている「地域貢献」をキーワードとした様々な取り組みや成果を改めて知ることができました。今回の特集では、本学における「大学COC事業」の前半の総括として、「大学COC事業」の課題と展望について考え、また最近の取り組みについても紹介させて頂きました。国では「地方創生」を掲げていますが、本学のような地方大学における地域貢献活動は、その方向性と良く合致していると実感します。今後もこの学報「蒼穹」を通して、内外の皆様にも本学の特色を知って頂けるよう、今後も努力して参りたいと思います。(記・広報委員長 高木 勝彦)



松本大学

〒390-1295 長野県松本市新村2095-1
TEL 0263-48-7200 FAX 0263-48-7290
<http://www.matsumoto-u.ac.jp/>